

國學院大學學術情報リポジトリ

書評 石野弥栄著『中世河野氏権力の形成と展開』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 須藤, 茂樹, Sudou, Sigeki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000200

〔書評〕

石野弥栄著 『中世河野氏権力の形成と展開』

須藤茂樹

この度、石野弥栄が、中世武士や戦国武将に関する書籍を精力的に刊行している戎光祥出版から戎光祥研究叢書5として、『中世河野氏権力の形成と展開』を上梓された。まずは長年のご研究が一書にまとめられたことにお慶び申し上げる次第である。

石野氏は愛媛県のご出身で、伊予河野氏をはじめ、伊予西園寺氏、伊予宇都宮氏など伊予の中世史に関する論考を数多く発表されている。本書は、石野氏の多くのご業績の中から、河野氏に関する旧稿一三本（うち改稿三本）を選び、新たに新稿四

本、それに序章を加えて一書としたものである。研究の進展や氏への批判については、新たな論考や補説、補注の付加で真摯に対応されている。

本書の構成は以下の通りである。

序章 本署の研究視角と構成

第1部 鎌倉―南北朝期河野氏の動向と権力基盤

第一章 鎌倉期河野氏の動向と鎌倉政権

第二章	伊予河野氏と承久の乱に関する一詩論 ——河野氏院方参加の背景——
第三章	鎌倉—南北朝期河野氏の遠隔地所領支配
第一節	鎌倉末期の河野氏と九州
第二節	南北朝期の河野氏と九州
第三節	鎌倉—南北朝期河野氏と美濃国
補論一	鎌倉初期の河野氏と北条氏 ——いわゆる元久二年閏七月日関東下知状の再検討——
補論二	南北朝期の伊予守護
第2部	室町期河野氏の守護支配の展開
第一章	室町期河野氏の分裂と細川氏・室町幕府 ——応仁の乱の前提を中心に——
第二章	河野氏の守護支配と瀬戸内の海上勢力
補論一	細川京兆家の伊予国支配
補論二	応仁の乱期河野氏の動向再論
第3部	戦国期河野氏をめぐる諸問題
第一章	戦国末期の河野氏と室町幕府 ——梅仙軒靈超の出自・立場・役割を中心に——
第二章	戦国末期の河野氏と南伊予の戦乱

第三章	戦国初期の河野氏およびその被官と禪宗寺院 ——「蔗軒日録」の所載記事を中心に——
第四章	伊予河野氏とその被官の高野山参詣について ——高野山上藏院との檀縁関係を中心に——
補論一	戦国期伊予武士の高野山信仰史料補遺 ——「南行雜錄」所載記事をめぐる——
補論二	「河野文書」の伝来と利用に関する一考察 ——「越前青木文書」を中心に——
初出一覧	
あとがき	
索引	

伊予河野氏は、鎌倉時代から戦国時代まで中世を通じて伊予において活動した伊予生え抜きの有力武士団であり、伊予の中世史を語る上で欠かすことのできない存在である。その伊予河野氏の動向について、鎌倉—南北朝期、室町期、戦国期の三期に分けて論考を配置し論じている。

まず序章では、中世河野氏の研究状況について史料環境や研究史に重点を置きながら触れた後、研究の視角、本書の構成に

ついで述べている。

河野氏関係の編纂史書による誤ったイメージ(虚像)をより確かな史料で修正することを目指している。また、『愛媛県史資料編 古代・中世』未収録の河野氏関係史料の収集・検討に力を入れている。しかし、河野氏に関する史料が中央の武家政権(幕府)と河野氏との政治的関係を示すものはあるものの、地域権力としての内部構造や基盤、支配状況などを具体的に示す史料は少なく、全体的な河野氏の実像を究明するのは困難とし、よって政治的な視点から中世の河野氏像を把握することを目的に据えられている。

先ず中世河野氏に関する研究史について、戦前から戦後にかけての伊予河野氏研究の動向を述べた後、河野氏権力の形成過程、それぞれの時期の河野氏の政治的動向や立場を説明することを中心に、西国武士の存在形態や性格を考える手がかりとしたいと研究の目的を明確にする。

第1部は、鎌倉時代から南北朝時代にかけての河野氏の政治動向やその基盤形成の問題について取り上げている。河野氏関係の文書や系図、記録類の検討から河野氏総領家と庶子との惣庶関係や源平合戦から承久の乱にかけての鎌倉政権との関係、

南北朝期の守護制度との関連性、鎌倉から南北朝期にかけての河野氏の遠隔地所領の形成と展開などを考察し、鎌倉・南北朝期の河野氏の動向・立場・性格を明らかにしている。

まず、第一章「鎌倉期河野氏の動向と鎌倉政権―河野氏の惣庶関係を中心として―」では、承久の乱に至るまでの時期、承久の乱後から蒙古襲来までの時期、蒙古襲来以後から鎌倉幕府滅亡までの時期の三期にわけて河野氏の惣庶関係の変化を論じた。契機は内乱や外敵の侵攻といった合戦であったとする。

東国後家人に比べて不明な点が多い西国御家人であるが、將軍との直接的結び付きの少ない国御家人と称せられる西国御家人の一般的性格と異なる豪族的御家人として鎌倉政権との結び付きが強いという性格を持つ河野氏の動向を明らかにされた。河野通直が西国御家人でありながら幕府内の有力な御家人に比肩するほどの立場にあり、それ以来在鎌倉御家人として鎌倉に居住することが多い、幕府の諸行事に参動して、幕府の吏僚的存在である、などを指摘している。

つづいて、第二章「伊予河野氏と承久の乱に関する一詩論―河野氏の惣庶関係を中心として―」では、源平合戦で源氏方について平氏滅亡に貢献した伊予河野氏はなぜ院方に付いたのかについて、①河野通信は北条氏との縁を嫌ってにわかに後鳥羽

上皇方に走った、②河野通信の嫡男通政は在京して皇孫の姫宮を娶って二子を儲けたなどの伝統的な見解に対して、いずれも確証はないとし、また山内議氏の河野氏と伊予守護との対立説、知行国主西園寺氏との対立説などの先学を批判し、河野氏の対幕府・北条氏の関係など河野氏の置かれた政治状況および河野氏の勢力基盤の再検討を加えたものである。河野氏院方参加の背景について、河野氏の東国御家人志向、通信の北条時政女婿説、牧の方事件との関与などから時政失脚後、幕府政治を主導する北条政子、義時らによる河野氏抑圧策に対する不満爆発が院方参陣につながったと推測された。

つづく第三章「鎌倉―南北朝期河野氏の遠隔地所領支配」では、有力武士団の研究にあたっては本領地での実態究明だけでなく、本領地と諸国に散在する遠隔地所領との関連性究明が必要との立場から、鎌倉末期から南北朝期にかけての河野氏と九州との関係について検討を加えている。

第一節で、鎌倉末期の河野氏と九州との関係について述べているが、弘安の役での戦功により、破格ともいえる恩賞を得ているとしたうえで、鎮西御家人ではないのにもかかわらず河野氏が弘安の役に参陣した理由について瀬戸内海域に強力な水軍を保持していたことをあげている。蓋し、卓見である。

第二節では、南北朝期の河野氏と九州との関係について所領支配の推移、九州の諸勢力との政治的交渉過程、九州各地における河野氏一族の動向など多方面からの検討により、南北朝期の検討を通じて河野氏総領自身が短期間の間に二度九州に渡海し失地回復に成功したたこと、九州、特に神崎荘は本拠地伊予に次ぐ第二の基盤であったことなどを明らかにされた。従来指摘されてこなかった伊予河野氏が足利尊氏の九州下向に同行したことは、九州所領の確保を意図したものであるとする見解も興味深い。

第三節では「諸家系図纂」所収の河野系図の検討などから、鎌倉から南北朝期までの河野氏と美濃国の関係について考察された。本節において濃尾国境域の河野氏末裔とされる稲葉・林・一柳氏、河野十八門徒の存在を指摘されている。

補論一では偽文書である「元久下知状」の詳細な検討から河野氏と北条氏の関係を、補論二では河野氏世襲分国制確立以前の南北朝期の伊予国守護の移動と室町幕府の支配の一端を明らかにされた。河野通盛、岩松頼有、細川頼有、細川頼春、通盛復職、細川頼之、通盛、頼之と目まぐるしい守護職の変遷を観応の擾乱などの政治動向のなかに綿密な検討から位置づけをおこなっている。細川氏と河野氏の激しい抗争を経て康暦の政変

の勃発により、河野通直が足利義満から伊予守護に補任され、ここに伊予国は河野氏が代々守護職を家督として相伝する世襲分国となるとされた。

第2部では、室町期伊予国守護河野氏の支配の展開を室町幕府権力との政治的關係、瀬戸内海の海上勢力との關係から論じられた。

応仁の乱の前提、応仁の乱、応仁の乱後における河野氏の分裂と伊予の在地勢力との關係、中央の幕府権力との關係を検討し、従来言われてきた將軍権力と地域権力（守護）との相互補完關係によって中世後期の中世国家は構成されているという通説に対して將軍権力と地域権力の分裂という視点を示された。

まず、第一章の「室町期河野氏の分裂と細川氏・室町幕府―応仁の乱の前提を中心に―」では、応仁の乱以前の室町前期の世襲守護河野氏の動向について論究している。河野通久と通元との対立、河野教通と通春の抗争など河野氏の分裂、細川勝元の伊予守護補任、大内氏の関与、応仁の乱における河野氏の動向を詳細に検討している。細川氏と河野氏の間で伊予の覇権をめぐって二〇年の長きにわたって抗争を繰り返されており、細川勝元は「四国管領」たる細川頼之を意識していた、勝

元は伊予を統治下に組み入れて四国全域統治を目指すという潜在的な野望があったとの推測は興味深い。河野氏の内紛に乗じて河野氏の抗争をより激化させることにより、四国における唯一の反細川勢力の削減を企図したものとする。そして、伊予での細川氏と大内氏抗争は応仁の乱の前哨戦として位置付けられるとする。応仁の乱においては、通春は東軍、教通は西軍として戦った。

つづいて、第二章の「河野氏の守護支配と瀬戸内の海上勢力」では、まず鎌倉・南北朝期の河野氏と海上勢力について、蒙古襲来時の河野氏参戦、浅海氏や今岡氏といった河野氏族の内海島嶼部への進出に触れる。ついで、室町期における河野氏の守護支配と海賊衆について、既得権益を獲得するために村上氏を中心に芸予諸島の群小海上勢力が結集し「能島衆」を形成した、頻出する「閔立」は警固番所といった施設ではなく海賊衆の呼称と考えるべきである、村上氏とは別の河野氏は以下の海賊衆（海上勢力）が芸予諸島に存在した、「閔立」（関方）は今岡氏のことである、室町期には村上氏や今岡氏以外にも多くの海上勢力が群立していた、戦国期に向かうにあたって村上一門に集約されていき、それらを河野氏が掌握していくとされた。また「海賊衆」という用語についても検討を加え、衆的結

合の時期を南北朝期とした。

補論一「細川京兆家の伊予国支配」では、足利氏一門の斯波・畠山両氏とともに幕府の管領として幕政上重要な役割を果たした細川氏は多くの守護大名が内紛を起こして凋落していくなか、分裂せず勢力を温存し、応仁の乱後、細川政元は明応の政変を経て幕政の主導権を握った位置を占めた。その細川家は細川氏の世襲分国ではない伊予の伝統的豪族河野氏の世襲分国である伊予を分国の列に加えている時期があり、細川氏の守護支配・勢力基盤の全貌を解明するために細川氏の伊予支配の実態と性格を検討している。

南北朝期の「四国管領」細川氏と河野氏、西園寺氏との抗争、国衙所在地の府中の掌握など、さまざまな政変との関わりなど伊予における複雑な動向を整理している。伊予が幕府に認められ河野氏世襲分国制が確立した後も東予の宇摩・新居二郡の割譲を受けた細川氏の介入は続いている。細川氏の伊予への領土的野心に河野氏は警戒しなければならなかった。さらに伊予における細川氏の勢力基盤となった細川氏に被官化された伊予の在地背力の実態を検討された。両属的な存在もあった。

本書の立場からすれば、細川氏の守護支配の実態を明らかにするために伊予支配を考えるというよりは河野氏権力の構造を

明らかにするために細川氏の伊予国との関係を考えてとしたほうが良いのではないだろうか。

補論二「応仁の乱期河野氏の動向再論」では、応仁の乱前期の河野通春、教通を中心に河野氏の動向を論じた後、東頸書状の検討から応仁の乱後期の河野通直をはじめとする東軍の動向を詳細に描写している。

第3部では、戦国期河野氏の動向について合戦の実態、戦国末期における河野氏の政治的立場とその活動について論じられた。

河野氏は小規模な一族間の内戦はあったが、大規模な合戦を行っていない。河野氏の実質的支配領域外の南予地域（宇和郡・喜多郡）で行われた鳥坂・高島合戦が唯一の大規模合戦といえた。河野氏はなぜ対外戦争ともいえるこの大規模合戦に参加したのか、その意義はどこにあったのかを再検討している。戦国末期の河野氏の政治的立場、動向について衰退する幕府権力にかわって大内氏、大友氏、毛利氏といった近隣有力大名との連携を図っているが、幕府との関係も継続すること、など戦国期の河野氏の特質を明らかにした。

まず、第一章「戦国末期の河野氏と室町幕府」——梅仙軒靈超

の出自・立場・役割を中心に——では、梅仙軒靈超関係文書の詳細な検討などから、室町幕府側近の梅仙軒靈超の出自や將軍側近としての立場や役割について検討を加え、ついで戦国末期の河野氏の政治的立場や性格について考究したものである。靈超は公家衆の徳大寺家の出身で細川氏の開基になる南禅寺塔頭岩栖院の院主であることを指摘し、室町將軍の側近としての活躍が知られて岩栖院主としての認識が希薄になり忘れられたとされた。ついで、將軍側近として登場する背景を述べ、さらに政治的役割について義晴・義輝・義昭時代の活動と役割などに言及し、その外交的役割を述べた。とりわけ幕府と河野氏を仲介する役割を長期間にわたり担当したのであり、河野氏に多大な影響を与えたとされた。

つづいて、第二章「戦国末期の河野氏と南伊予の戦乱——高島・鳥坂合戦を中心に——」では、確実な史料から河野氏の合戦関与がわかる事象は少ないとし、南伊予の宇和郡における永禄年間の諸合戦（「永禄合戦」と総称）について高島・鳥坂合戦を中心に検討を加えている。特に永禄十一年（一五六八の）鳥坂合戦は中予の河野氏と土佐一条氏、伊予西園寺氏、喜多郡の宇都宮氏、さらには安芸国の毛利氏が加わっており、「永禄合戦」は河野氏にとっては大規模な数少ない対外戦争であったさ

れた。「永禄合戦」に関する近世の軍記や史書、地誌に検討を加え、ついふえ近代以降の研究の歩みをたどり、河野氏の動向と立場、「永禄合戦」の特質や意義に言及された。一連の合戦発生の前提は宇和郡・喜多郡の国郡境目の領主間の紛争激化があり、それに河野氏と宇都宮氏、西園寺氏と宇都宮氏、西園寺氏と一条氏の領土紛争をめぐる抗争が結びついて大規模化される。喜多郡及び宇和郡は伊予河野氏と土佐一条氏にとっては中間地帯（緩衝地帯）としての性格を有したとされる。また河野氏の積極的合戦関与には一國守護としての意識が強く存在していたからだとされた。

第三章「戦国初期の河野氏およびその被官と禅宗寺院——「蔗軒日録」の所載記事を中心に——」では、戦国初期の河野氏と東福寺系禅宗寺院との関係を、東福寺僧南山土雲とその法脈、季弘大叔の日記『蔗軒日録』の検討による東福寺系禅院ネットワークの展開、応仁の乱の際に河野氏が設置した在京雑掌僧を対幕府・細川氏との交渉窓口としたことなどを明らかにされた。河野氏とその被官の禅宗受容の過程が明らかになった。

第四章「伊予河野氏とその被官の高野山参詣について——高野山上藏院との檀縁関係をを中心に——」は、高野山上藏院の史料から河野氏とその被官の高野山参詣の実態や政治・経済的な背景

を検討したものである。中予地域の河野氏被官には河野氏の支流が多く、譜代の被官として守護代や支城主、各種奉行を務める家柄であること、河野氏と関係のある来島村上氏系は「上蔵院文書」に見えるが能島・因島流村上氏はまったく見えない、河野氏支配権外の南予（宇和郡・喜多郡）の戦国期領主もまた河野氏と関係を結ぶに及んで上蔵院との関係が生じたとのことである。

補論一「戦国期伊予武士の高野山信仰史料補遺」「南行雑録」所載記事をめぐる——は、「南行雑録」所載の上蔵院関係史料・記事について紹介、検討したものである。また、補論二「河野文書」の伝来と利用に関する一考察——「越前青木文書」を中心に——は、河野家文書の伝来について検討を加えたものである。河野氏に関する史料、いわゆる「河野文書」の伝存状況や伝来過程についても論究している。この問題は、河野氏の総領家が中世末、戦国期に歴史の表舞台から姿を消し、豊臣政権下や近世の幕藩体制下で河野氏一族の末裔が諸国の諸大名に仕官する家臣として生き延びたことと大きく関連している。近世移行期、さらには近世を通じて「河野文書」が各地に伝来し、書写され、利用され、そして現在に残されたのである。天正十三年（一五八五）豊臣秀吉の四国平定を経て惣領家当主河

野通直が伊予の支配権を明け渡して安芸国竹原へ赴き、その地で死去したが、その後裔たちが毛利家や浅野家などの近世大名の家に仕えて河野家の名跡を残した。しかし、惣領家に伝えられた「河野文書」は実物と伝存するものは少なく、河野氏関係の編纂物に引用され、今に伝えられているにすぎない。「越前青木家文書」（仮称）に含まれている「河野文書」の入手と伝来ルート、宛所を自家にすり替えて利用について明らかにした高論である。

最後に付された索引は、件名、地名、人名、寺社名、史料名と詳細で、愛媛県外の読者には有益である。

最後に少し課題というか、石野氏へのお願いを記して、稿を閉じたい。

石野氏自身も随所で述べられているように、史料の制約があるため致し方ない面があるが、推測にならざるを得ないところが多くある。難しいことではあるが、今後新たな史料などが発見されたりして、論が深まることを期待したい。しかし、いずれにしても、河野氏の存在形態、政治動向、政治的立場などの究明の足がかりになる基本的論文集になることは間違いない。著者自身も触れられているように、河野氏の居住、移住など

で他国へ進出した河野氏一族の研究に関する論考が未収録であり、今後の課題とされているが、是非見解を提示していただきたい。また、註にも一部あげられているが、細川氏、伊予西園寺氏、伊予宇都宮氏、土佐一条氏などの周辺諸勢力の論考も多く残されており、是非まとめて出版されることを切望するところである。

紹介者は、河野氏をはじめ伊予中世史を専門としないものであるが、四国中世史とともに学ばせていただいていることから、本書の紹介をさせていただくことになった。そのおかげで深く中世伊予河野氏の動向について勉強させていただく機会が与えられたことは、望外の幸せである。お礼申し上げますとともに、浅学のため誤解や間違った紹介をしているのではないかと危惧しており、著者並びに読者のご寛恕のほどをお願い申し上げます。次第である。

(A5判、五二六頁、戎光祥出版、二〇一五年六月発行、定価
一二〇〇〇円＋税)